

『写実と想像のはざまー「意識下の意識」』 : ワーズワスの詩想への一考察

廣田, 稔
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5343>

出版情報 : 言語文化論究. 13, pp.1-13, 2001-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :

『写実と想像のはざま ―「意識下の意識」』 ワーズワスの詩想への一考察

廣 田 稔

先の拙論は『序曲』第三巻冒頭のワーズワスが故郷の湖水地方を離れて、ケンブリッジ大学入学のため初めてケンブリッジの街並みにキングズカレッジチャペルを眼の当りにした記述についてのものであり、特にこのチャペルの描写が1805年版と1850年版において、“long-back'd Chapel of King's College”から“long-roofed chapel of King's college”と書き改められたことに着目したものであった。この書き改めに至る必然性を歳月の流れがもたらした詩人の精神の成長的变化を辿る中に跡付けようと試みた。情熱的感性の赴くままに想像の翼を奔放なまでに逞しく広げていた若き詩人が、窮局的に自らを育てはぐくんだ故郷の自然が啓示する人間性に対する愛と人間性の尊厳に対する自覚と信頼に導かれ、魂を鎮められ、人間的成長と共に奔放な想像力にも抑制がもたらされていったことに基づいた結果による書き改めであったと結論付けた。

この論考では、上記のような書き改めの背景にあるワーズワス詩想の一面に着目し、詩人が自らの眼で確認し、描き出す対象の写実的実像とその実像を超えた想像的虚像との渾然的融合はどのような詩人の意識性に基づくものかを考えてみたい。

ワーズワスは自己の詩作の中に写実と想像との混交という問題を意識的に或いは無意識に組み込んでいたと思われる。それは先に見たように、空想というものが前面に押し出された形を呈する場合もあれば、読者が一見して写実と想像の入り組みに気付き難い場合とあった、詩人の側で想像性を意識的に抑制したものとも思われる場合とがある。意識的とは言いつらも、そこに詩人がその意識を意識として明確にしているとは必ずしも言い難いような点を含み込んでいるように思われるからである。ワーズワス自らの表現を用いれば“under-sense”（第7巻711行）即ち「意識下の意識」がそのような不分明な領域を詩人の意識の中に生み出させているのかも知れない。しかしこの意識は事物の「部分を部分として見るのではなく」、「全体」を見る感覚と結びつくものであり、そして究局に於いて神への知覚にも導かれる感覚となっているのである。それはおそらくワーズワスが詩作の過程に“retrospect”（回想）という点を基本的姿勢として保持していたことにも係わるのかも知れない。我々はここで当然のこと乍ら詩人自身のいくつかの言葉を想起する。詩が「静かな時に憶い起こされ」作られるものという言葉であり、自然の事物であれ、人間の生活の有様であれ、詩人にとってあの『ティンターン寺院』の中にある“the picture of the mind revives again”「心の風景がよみがえる」という言葉である。これらの言葉が示すものは改めて言うまでもなく、肉眼で認めたものがいったん心の中に受け止められ、そこに心象風景が内面で外界の物象を逆照射し、映し出すことによって、実体とその映像との渾然たる融合を生み出し、実体を見つめる自己の存在そのものを内側から眺め直すことができる

ということになるのである。このことを象徴的に表しているように見える次のような件りを第4巻247行以下に認めることができる。

As one who hangs down-bending from the side
 Of a slow-moving Boat, upon the breast
 Of a still water, solacing himself
 With such discoveries as his eye can make
 Beneath him, in the bottom of the deeps,
 Sees many beauteous sights, weeds, fishes, flowers,
 Grots, pebbles, roots of trees, and fancies more;
 Yet often is perplex'd, and cannot part
 The shadow from the substance, rocks and sky,
 Mountains and clouds, from that which is indeed
 The region, and the things which there abide
 In their true dwelling; now is cross'd by gleam
 Of his own image, by a sunbeam now,
 And motions that are sent he knows not whence,
 Impediments that make his task more sweet;
 --- Such pleasant office have we long pursued
 Incumbent o'er the surface of past time
 With like success;...

ゆっくりと進んでいるボートの舟べりから静かな水面に身を乗り出すようにして、眼下の深い水底に雑草や魚や花、ほら穴、小石、木の根といった多くの美しい光景を見て自らの心を慰め、そしてまた一層の空想をめぐらせるのだ。

それでも実体とその影とが、岩と空、山と雲が実際その水中にあって本当の住み家にある物象と分ち難くなってとまどうことがしばしばなのだ。

そして今度は太陽の光によってどこからか分からないながら伝わってくる動きによって自分自身の姿がきらめいて交錯し、そうした邪魔者が自分の目下の営みをさらに一層楽しくさせてくれるのだった。－

そうした愉快的な仕事を僕らは長い間行って、過ぎ去った過去の時間の表面によりそったのだ。同様の成果を収めながら…

このような過程を辿る以上、詩作の対象物は基本的には先ず、この精神のろ過作用を経るための物理的時間を要することは当然であり、その物理的時間の進行する経緯の中に、その対象物に関わる諸要素の混入をも許容することになる。しかもそれら諸要素は必ずしもクロノロジカルな秩序立った時間の配列で混入されるとは限らず、詩人の記憶のどこかに溶け合い混在するのである。

第8巻174行～178行にある以下の記述はこのことを伝えている。

I have singled out
 Some moments, the earliest that I could, in which
 Their several currents blended into one,
 Weak yet, and gathering imperceptibly,
 Flow'd in by gushes.

私は出来る限り早い時期からのいくつかの折々の時を選び出したが、その折々の時の中にいくつかの流れが一つのものと同流し、なお弱々しいものながら、いつの間にか気付かれないうちに奔流となってほとぼしり流れて行った。

このようにして出来上がった詩作の中では、事実と異なるずれも生じることになるのも、あなたがち詩人の思い違いばかりとは言い切れぬことになる。とは言え事実と相違することが詩そのものの価値を根底から揺るがすことででもなければ、その相違の是非を問うてもさしたる意味はないことは言うまでもない。その相違の記述にこそその背景に詩人としての感性と詩的情緒が潜められていて、詩作の依り所となる本質的問題があるからである。例えば第5巻に挿入されている“*There was a Boy*”は、Coleridge が激賞し、*Lyrical Ballads* に収録され、*Poems of Imagination* の冒頭を飾る詩であるが、この詩の中の出だし、“*ye Cliffs And Islands of Winander*”はこうした点を考える好例ではないだろうか。

「おまえたちウィナンダーの切崖よ、島々よ」とあるものの、このような Cliffs は詩人がウィナンダーと称するウィンドミア (Windermere) 湖周辺には果たしてどれほど現実に存在するというのだろうか。とりわけこの詩の中の少年がフクロウの声をまねてフクロウと鳴き交わす湖がエスウェイト (Ethwaite) 湖とみなされている点にこのような疑問を抱かせられる。

詩の記述と、現実のトポジカルな地形との合一のみを求める限り、そのような疑問を禁じ得なくなってしまうのである。エスウェイト湖はワーズワスが少年時代を過ごし、彼の通ったグラマー スクールのあるホークスヘッド (Howkshead) とベアトリス ポッター (Beatrice Potter) 女史のヒル トップ (Hill Top) で知られるニア ソーリー (Near Sawrey) との間に横たわる小さな湖水で、周囲を起伏のなだらかな低い丘陵で囲まれ、ソーリー村への湖畔沿いに続く一本の細い道を辿りながら湖水全体を見渡することができる。そこにはどこにも切り立つ断崖などというものは存在しない。Cliff で自ずと連想されるものは、例えばエミリ・ブロンテの『嵐が丘』の主人公ヒースクリフ (Heathcliff) の名の由来する、ヒースの生える荒野の崖である。この場合には、ヒースクリフとキャサリンの二人だけの愛の象徴の砦とも称すべきペニストーン クラッグ (Peniston Crag) という切り立った崖が現実に存在し、ポンデン カーク (Ponden Kirk) という岩場として知られている。この岩場は、作者エミリとブロンテ一家の牧師館のあるハワースの街をはずれて荒野の道を数マイル登った荒涼とした谷の向こうに突き出している岩場である。筆者もさすがに冬の雪の中では谷に滑り落ちる危険性もあり、谷の向こうに見えるこの岩場に辿りつくことが出来なかったが、夏場にこの岩場にたどり着いて、崖の下まで急斜面をつたい降り、この崖の中の窪みの中にまで足を踏み入れた経験を持っているが、このような岩場こそ Cliff と称するにいかにも相応しい崖である。このような明らかに Cliff とみなされるものはエ

スウェイト湖周辺には見出すことができない。従ってワーズワスの場合には少なくともこの詩に限って言えば Cliffはこの詩人の象徴的表現と言う以外にはないかも知れない。

これこそ既に見たような詩作における精神のろ過作用によって詩人の心の記憶に断片として写され残っていた残像が、この時、時を得てロマンティックな響きと意味を込められ象徴的に描かれたものと言えるのではないであろうか。詩人の「意識下の意識」がもたらした象徴的暗示物とも言えるであろう。詩人は確かに切り立つ崖を眼の当たりにした経験を持っていた。『序曲』第1巻372行～427行には少年時代の頃、Westmorelandの西北部に位置し、後に詩人が「水仙」の名詩に歌った水仙群をその岸辺に認めた Ullswater 湖の南端にある Patterdale 溪谷の、ある湖畔につないであった羊飼いのボートを無断で漕ぎ出した時のエピソードが記されている。少年ワーズワスが漕ぐボートは、白鳥のように湖面を滑っていくが、丁度その時、それまでは地平線の境界にすぎなかった険しい「巨大な岩山」“a huge Cliff” がまるで自分の意志の力に満たされたかのようにむっくりとその頭を上げ、更に背丈を増して、「私と星々の間に立ち上がり、調子の整った足取りで、まるで生き物のように大まかで私を追ってきた」という自然の驚異を体験したことを記している。また第13巻に見られるように、ワーズワスは1791年の夏スノードン (Snowdon) に登ったことを記しているのもその一例である。この英国最高峰の山に夜間の登山を試みた詩人は、突如霧の中から明るい月光の中に照らし出され、彼の眼前に広がる広大な霧の海の中に、山々の頂があたかも島々であるかのように浮かんでいるのを認める経験をしている。

現在スノードンの頂上まで登山鉄道が登っており、ふもとの駅から約1時間で登ることが出来る。徒歩で登る人も多く所々で登山者の姿が認められる。頂上まで約3時間とのこと。登山鉄道は山の陵線づたいに走っているが、頂上近くになると険しい崖の側面はかなりの勾配となっており、列車の窓から切り立つ断崖と谷底の地形が眺め降ろされるのである。この景色はまぎれもなく Cliff 以外の何ものでもない。頂には絶えず霧が流れていて、視界が途切れて周囲の山並みのはっきりと見渡せるかと思う間もなく、やがて霧と雲で視界がすっかり閉ざされてしまう。ワーズワスは霧の中に浮かぶ山々の頂を認める一方で、霧の合間に切り立つ断崖を眼の当たりにしていたに違いないのである。そのような時の Cliff の残像が今ウィナンダーの景色の中に混入させられているものと察せられる。

詩人はこの時の状況を次のように記している。“a fracture in the vapour” 「途切れ途切れの水蒸気のもや」の中から “the roar of waters, torrents, streams/ innumerable, roaring with one voice.” 「流れ、ほと走る奔流、小川、そうした数多くのものが一つの声となつてごうごうたる響きを立てている」と。この件りは既に見た、第8巻174行～178行の記述と酷似していることに気付かざるを得ない。“Their several currents blended into one... Flow'd in by gushes.” と記されていたものと。スノードンの山頂で聞いた川の流水の音は登頂の途中途中で耳にして、詩人の耳に消えやらず残っていた水音の合流という現実的響きのように聞こえなくもない。しかしここでもやはり第8巻の箇所、過去の経験の中から拾われた瞬間瞬時がより集って、奔流となつて合流することを象徴的に表現している意識とさして融離するものではないだろう。スノードンの水の音も山頂で現実には聞こえないことは筆者も確認したがこの水の音も、詩人が過去に目にしたものを内面の心眼で捉え直していくあの精神作用と基本的には同一のものであるであろう。『序曲』第一巻595行目に “Of Cumbria's rocky limits” とうたつた箇所を初めとして異なる箇所でも詩人が言

及する“Cliff”は、表面的には一見詩人が折々の時期と場所において認めてきたものの写実的な描写であるような様相を呈している。しかしながらそれらは写実的な風景描写であると同時に、詩人が過去の瞬間、瞬間に認めたものの心象風景を形成するものであり、象徴的な意味を込められて、情景描写の中に組み込まれているのである。

『序曲』第一巻 625行～640行には以下のように記されている。

And if the vulgar joy by its own weight
Wearied itself out of the memory,
The scenes which were a witness of that joy
Remained, in their substantial lineaments
Depicted on the brain, and to the eye
Were visible, a daily sight... these same scenes,
So beautiful and majestic in themselves,
Though yet the day was distant, did at length
Become habitually dear, and all
Their hues and forms were by invisible links
Allied to the affections.

そしてたとえ肉体に感じた喜びが肉体的喜び自らの重みに疲弊し記憶から失われることがあるにせよ、その肉体の喜びを眼の当たりに目撃した光景はその実質的輪郭を取って、脳裡に描かれて留まり、日常の光景として目に映るのであった……それ自ら極めて美しく荘厳なこれらの同じ光景は、既にその日は遠い遥かなことながら、ついには常に親しいものとなり、その色合いと形とは目に見えぬ鎖によって愛情と結ばれていった。

このようにして、過去に見た自然の風景が心の中に留まり残ることを述べている。

いま少しこの心象風景について考えてみたい。“There was a Boy”の少年が眠っている教会について417行は“the Churchyard hangs Upon a Slope above the Village School”となっている。実際に登ってみると、教会は確かにホークスヘッドのワーズワスが通ったグラマー スクールの裏手を登った小高い丘の上にあることに間違いはないことながら、その丘は決して険しくはなく、なだらかな丘陵である。教会そのものの状況はしっかりと安定した場所に建っていて、安定しているがために静かで平安なたたずまいである。しかし、この一行では教会の建っている状況について“hangs”という動詞が使われていることによって、恰もこの教会が崖の上にかにも心許ない状況で建ち、崖の淵にしがみつくようにぶら下がっているかのようなイメージとなっているのである。その意味で教会の描写はいかにもprecariousな感を免れ得なくなっている。ここでもCliffの持つ象徴性と一種似かよったものが“hang”という語の使用の背景にあるように思わざるを得ない。『ティンターン寺院』の中にもCliffが以下のように記されている。

Once again
 Do I behold these steep and lofty cliffs,
 Which on a wild secluded scene impress
 Thoughts of more deep seclusion; and connect
 The landscape with the quiet of the sky.

また私は再び目にするのだ。
 荒々しく隔てられた光景にさらに深い隔絶の思いを刻み、
 この光景を空の静けさと結びつけているこれらの険しくそびえ立つ断崖を。

この部分を読む限り、我々の脳裡に浮かぶこの詩の情景は、険しくそびえ立っている切り立つ断崖の荒涼たる光景である。筆者はしかし、実際この地でもティンターン寺院とその岸辺を流れるワイ河周辺に「険しく高く聳える崖」を十分に確認することができなかった。

ワーズワスは、『序曲』11巻55行目から60行に『序曲』執筆によって自ら期待するものを以下のように述べた。ここでは Cliff という言葉ではなく gulf を用いているものの、この言葉の意味するものは越えられぬ大きな隔たりという意味において Cliff と基本的に差異はない。

My business was upon the barren sea
 My errand was to sail to other coasts
 Shall I avow that I had hope to see
 I mean that future times would surely see
 The man to come parted as by a gulf
 From him who had been

私の仕事は荒海へ乗り出すことであった
 私のなすべきことは他の岸辺へと船出することであった
 かつての自己とは恰も入海によって隔てられているかのように異なる者の出現を必ず
 未来が見守ることになることを私は誓ってもよかったのだ

gulfは入海であると同時に gorge や ravine を意味し、両側に Cliff を持つ峡谷を意味する。ここで gulf を渡り他の岸へ辿り着くことは、乗り越え難い理想の詩精神 に辿り着くという象徴性を帯びたものではないだろうか。先に Cliff に関して『嵐が丘』を引き合いに出したが、作者エミリー・ブロンテは荒野をさまようキャサリン・アーンショウの亡霊に自然の懐に帰ったワーズワスの「ルーシー グレイ」に明らかに示唆を得て、ルーシー グレイを重ね合わせていると思われる。荒野に住む愛らしい少女ルーシーはある雪の夜嵐に会って行方知らずとなってしまう。だが今でも彼女が生きているという人もいて、彼女が一人荒野を飛び跳ねて、その歌声が風に鳴っているというのである。キャサリンの亡霊が出現するのは吹雪の嵐の夜であり、「地球の日ごとの動きによって岩や石や木とともにめ

ぐるばかり」と歌われるルーシイ同様、キャサリンもまた「自然の精」¹⁾であった。『嵐が丘』の終章で羊飼いの少年が、キャサリンとヒースクリフが相たずさえて荒野を歩いている姿に出くわすのにも、二人が今も生きているということ、ルーシイ同様に美しい自然に回帰して、自然の靈性と合一して新たな生命を得ているという原型的パターンを認めることができる。また“*There was a Boy*”で、少年であった頃の詩人が亡くなった少年の墓を眺めていたというあの結びの件りこそ、『嵐が丘』の語り手のロックウッドが、半ばヒースクリフのまだ剥き出しの墓石を立ち去りかねず眺めながら、死者の眠りに思いを馳せるあの結びの件りと符合している。キャサリンとヒースクリフにとって Cliff は彼らの至高の愛のモニュメントであり、二人の前に立ちほだかって、地上では乗り越えることも不可能なものながら、それを乗り越えることを志向することに示されるメタフォリカルな愛の象徴の暗示物であったことは紛れもない。

さて Cliff という語の持つイメージとその象徴性を更に検証する時、この Cliff のイメージが、詩人が好んで用いている poetic diction の一語“hang”という語と密接に係わっているようにも思われる。

先に挙げた『序曲』第4巻247行から248行(“*As one who hangs down-bending from the side /Of a slow-moving Boat;*”)ではボートの舟べりから身を乗り出した状態を“hang down”と表現されている。また“*There was a Boy*”では少年がまるで爪先き立つような恰好でフクロウの鳴き声に耳を澄ましてでもいるかのようなその様子が“*hung listening*”,そして教会の建っている様子は“*the Churchyard hangs*”と表現される。これらいくつかの例に見られるように“hang”という動詞が意識的に用いられるが、いずれにしてもこの語によって読者は何か不安定な体勢、心もとない状態の印象を受けざるを得ない。第1巻341行目から347行目で見える“hung”はまさしくそのような印象が与えられるものである。

Oh! when I have hung
Above the raven's nest, by knots of grass
And half-inch fissures in the slippery rock
But ill sustain'd, and almost, as it seem'd,
Suspended by the blast which blew amain,
Shouldering the naked crag; Oh! at that time,
While on the perilous ridge I hung alone,

ああ私はみやまガラスの巣の上方に草の束をつかんで
つるつるした岩の中の2センチにも満たない亀裂のところで
覚束なく不安定に身を支えてぶら下がっていた。そして殆ど
むき出しの岩を肩で押し上げるように激しく吹く突風によって
宙につるされたように。

あああの時危ない崖の縁に私は一人ぶら下がった。

第2巻198行は丘と丘の中間に掛かっている月を眺めて詩人は

Standing to look upon her while she hung

Midway between the hills

「月が丘と丘との間の中ほどにかかっている間、月を眺めようとたたずみながら……」と表現する。第1巻317行には“my shoulder all with springs hung.”「肩にかつげるだけワナをぶら下げて」という箇所。更に341行また347行には“on the perilous ridge I hung alone”「危険な崖のふちにぶら下がって」という記述等がある。こうしたいくつかの表現の中で、筆者が最も興味を抱くのは、‘the Churchyard hangs’ と教会が丘の上に ‘hang’ していると述べられる記述である。このように詩人が表現する時、どのようなイメージによって詩人は触発されていたのだろうか。それは詩人には庭園に対する関心があったことに多少係わりを持つのであろうか。

8巻119行以下には詩人の育った自然が『失樂園』にあるという楽園よりも、またタタール王朝の「ジェホールの有名な庭園」“Gehol’s famous Gardens” (123行) よりも美しいという表現がある。130行から133行に “With palaces and Domes /Of pleasure spangled over, shady dells/ For Eastern Monasteries, sunny Mounds/ With Temples crested...” 「宮殿と逸楽の殿堂を散りばめ、東洋の僧院の立つ緑陰の谷間と寺院を冠のように戴く陽の当る丘」と詩人がうたうこの山荘の美しい庭園を持つというこの 宮殿は、de Selincourt が引用している Lord Macartney の *Travelers in China* (1804) によれば、次のように記されているようである。

“It is one of the finest scenes in the world; wild, woody, mountainous and rocky...

In many places immense woods... grow on almost perpendicular steeps.

There at proper distances you find palaces, banquetting houses and monasteries...”²⁾

即ちこの宮殿は野趣に豊み、森林と山岳の岩場のある世界中で最も美しい情景の中に位置し、多くの場所で巨大な森が殆ど垂直な 崖の上に茂って、宮殿や宴会楼や僧院が見られると言う。ここに見られるようにこの宮殿が「殆ど垂直に聳える険しい崖」の上に位置していることは詩人の関心と結びつくものである。

詩人はまた第7巻81行～83行にかけてかつて耳にした宮殿や庭園に言及して、特に古代のバビロンの古都について述べる。このバビロンにはその昔ネブカドレザルII世によって築かれたという “Hanging gardens of Babylon” と称されるものが存在したとされている。この庭園の存在した場所は定かではなく、地形も確かではないが、“hanging” という形容の語からして、これもまた険しい断崖上に位置したものではないかと察せられる。このように際立って聳える崖上に建てられている建造物に対する詩人の秘かな憧憬を感じさせられる一方、“There was a Boy” 中の教会のたたずまいを “hanging” と描写している詩人の意識が多少ともほの見えてくるように思われるのである。既に見たように詩人にとって Cliff やそれに相応する岩場は、詩人の想像の中で心理的シンボルであったことは確かであろう。“hanging” という語を用いた詩人の意識に上のような古来の庭園のイメージがあったと同じく、詩人には具体的にエディンバラ城のイメージも多分に重なっていたのではないかと推測される。それは『序曲』の中で、エディンバラ城について描写している表現が教会を語った表現と極めて類似していることによる。第7巻270行～271行に

“Edinburgh Throned / On crags, fit empress of that mountain Land;” 「あの山岳地の女王にふわさしく崖の上の玉座についたエディンバラ」とエディンバラ城を物語り、この数行後274行～276行目には、ローマ東北の Sabine Hills の750フィートの岩山に立つという “The Falls of Tivoli” 「ティボリの滝」並びにティボリの険しい岩壁上の神殿について “high upon that steep/ The Temple of the Sibyl” 「あの険しい岩の上、高々と建つ古の女予言者の神殿」と記されている。

一方ホークスヘッドの教会は、第4巻、ケンブリッジからの初めての夏の休暇を迎えてホークスヘッドへ帰郷した時、その美しい谷間の姿と共に描かれる。

I took my way, now drawing towards home,
To that sweet Valley where I had been rear'd;

...

I saw the snow-white Church upon its hill
Sit like a thronèd Lady, sending out
A gracious look all over its domain.

(Book IV l. 10-15)

今や私は我が家目指して

私の育ったあの美しい谷間へと道を辿って行った

.....

私は雪のように白い教会が丘の上にまるで玉座に坐した女王のように座っているのが見えてきた。

その領土の隅々に恵み深いまなざしを投じている姿が

(原文下線筆者)

ここには第5巻にある “hanging” という感は払拭されたものとなっている。とは言え、第5巻でも、教会の墓地に少年の墓をじっと見つめながらたたずんでいた事を記した直後の423行～426行には、

“Even now before my sight, methinks, I have
that self-same Village Church: I see her sit,
(The thronèd Lady spoken of erewhile)
On her green hill;”

「今でも私は眼前にあの同じ村の教会が見えるような気がするのだ。私は教会が、（私が少し前に玉座に坐した女王と語ったが）緑の丘の上に坐っているのを」

と、やはり “hanging” という一種 precarious な感を読み取ることは出来ない。

いずれにせよ、先のエディンバラ城についての “throned”, “empress” はこの教会では

“thronèd Lady”という形で表され、両者は意味的に同じ表現であり、しかもその教会がその領土に恵みのまなごしを投じるというのは、詩人がこの教会にエディンバラの城を重ね合わせ見ていたからと察せられる。そこには既に見た崖上に聳えたタートル王朝のジェホール庭の宮殿が、皇帝の宮殿というイメージもあるだろう。エディンバラ城は北の都エディンバラの街の中央に高々と聳え立つ巨大な岩場の崖の上にまさしく玉座にふさわしく建っていて、城の上からは街の四方が眼下に見下され、そこから君主の恵みのまなごしを領土に投じているというのがいかにも似つかわしく感じられるのである。そしてこの城を、下からほぼ垂直に切立つ崖がその壁の一部でもあるかのように支えているこの城の威容は“hanging”というにはあまりにも堂々としている一方で、まさしく崖っぷちに掛かっているような状態に見える。他方静かな湖水地方の小さな町の緩やかな勾配の小高い丘の上に立つ教会は、エディンバラ城の雄壮なたたずまいとはまったく対称的で、この両者に詩人が同じような「玉座に坐した女王」と言った表現を用いていることは見方によれば奇異な感も免れ得まい。しかし、この教会は詩人の想像の中で、いかにもロマンティックな形に変容させられ、それは彼の至高の詩精神の宮殿とでも言えるような象徴性を与えられているようにも思われる。431行～433行に“May she long/ Behold a race of young Ones like to those with whom I herded!”「教会がかつては私自身もその同じ群の一人であったような子ども達を見守ってくれるように」と詩人は乞い願う。ここににじみ出ているのは、「子供は大人の父」と詩人が称するように、自然の中に宿る神の精神に最も近い魂を持つが故にこそ、最も神性を宿す子供たちを、そしてかつてはその一人であった自分をも守護してくれることを願う祈りである。『一人の少年がいた』の詩の少年は死して神と自然の懷に帰り、真の神性を勝ち得たのであり、その神性こそ、ワーズワスにとってその至高の詩精神の目指すものであった筈である。この丘の教会の姿は、詩人が求めてやまない潔れなき気高い人間精神への讃歌の象徴であったと思われる。第12巻220行～231行にはこのように記されている。

Here calling up to my mind what then I saw
 A youthful Traveller, and see daily now
 Before me in my rural neighbourhood,
 Here might I pause, and bend in reverence
 To nature, and the power of human minds,
 To men as they are men within themselves.
 How oft high service is perform'd within,
 When all the external man is rude in shew,
 Not like a temple rich with pomp and gold
 But a mere mountain-Chapel such as shields
 It's simple worshippers from sun and shower.
 Of these, said I, shall be my Song;

ここに於いて私がかつて青春の旅人として目にし、
 今また私の眼前にこの田舎の隣り人たちの中に

日々目にするものを思い起こして、私はここに足を止め
 自然と人間精神の力とに、身の内に人間の真の姿を備えた
 人々に敬虔に頭を垂れたく思うのだ。
 人々の外見がいかに粗野であれ、心の中では
 いかにしばしば崇高な祈りの時が持たれていることかと。
 それは華麗で黄金に飾り立てられた聖堂というのではなく
 素朴な会衆を日射しからも雨からも護る山の小さな教会堂なのだ。
 これらのものについて私はこれからも歌い続けたい。

さてこの論考の出発点となった“long-back'd”から“long-roofed”への書き直しの必然性への推測にいま一度立ち戻ってみることによって、詩人の写実と想像の渾然融合の意味合いの結論づけを行わねばならない。

第2巻37行～41行に次のような言葉がある。

詩人は自然に対する大きな喜びを感じ、自然は秘かな幸福の源であり、この上なく自然を愛する気持ちは以前と変わらぬほどであったと述べた後に続く言葉である。

And yet this passion, fervent as it was,
 Had suffer'd change; how could there fail to be
 Some change, if merely hence, that years of life
 Were going on, and with them loss or gain
 Inevitable, sure alternative.

だがこの（自然に対する）情熱は熱烈なものではあったけれど変化を受けていたのだ。人生の歳月が流れ続け、その歳月と共に失われるものも手に入れられるものも確かに代わる代わる避け難いことであるという単にその理由によるのだとしても、どうしてどのような変化も起こり得ないというのであろうか。

このように過ぎ去った歳月がもたらす変化とその変化の持つ意味を我々に最も良く伝えてくれるものの一つとして『ティーンターン寺院』がある。

ウェールズ南部の静かな山間に、その山間を流れるワイ河の岸辺にこの中世の僧院の廃墟が残る。この寺院に続く山道はどこか日本の山道のような趣があるが、僧院はこの山間の村に静かなたたずまいを見せている。詩人がこの僧院を最初に訪れたのは1793年であったが、この詩はその後5年の歳月を経てここを再訪した時、この僧院とワイ河の風光を歌ったものである。詩人が五度の夏ととりわけ詩人にとって厳しい精神的試練の時の象徴とも言える五度の冬を過ごした後の精神の哲学詩である。この僧院のたたずまいは厳肅さに満ち、周囲の山と清流との自然に囲まれた聖地に立つ聖堂にふさわしく、訪れる者に自ずと自然とその中に生かされる人間の生につき深い思いを誘うものがある。詩人がここに哲学詩を生み出したのは自然の成り行きであったろうとすら思われる。この哲学詩は国を越えて、自然と人生を深く心に留めた我が国の詩人とりわけ国木田独歩にも、この詩に触発さ

れた小品『小春』を生み出させたことはここにあらためて言及を要しない。

ワーズワスはこのワイ河畔の美しい光景を五年という歳月を融てて再び目にするが、しかし詩人は過ぎ去ったこの歳月の中で、常にこの光景に立ち戻って、この光景と僧院を心眼に見続け、心の風景としてよみ返らせていたのである。かつて少年の時、パターディルの湖畔の羊飼いのボートを無断で漕ぎだした時、背後の岩山から追いかけられるといったような例に見られたように、自然が一つの生命体として息づくものとして感じられていた。キングズ カレッジのチャペルに角を持って横たわる巨大な獣という動物のイメージをも抱いていたのである。しかしそのような想像力を逞しくしく躍動させていた詩人の感性はいつしか静かな形で消滅して、明らかに「喪失」の思いを抱かせられていった。しかしその喪失は詩人にとっては新たな精神の創造の始まりともなった心の収穫の時をもたらしたのである。恐らくこうした厳粛にして清らかな聖地を守護する自然の持つその清らかな威厳に、自らも心清められ慰められる思いを得たからに他ならない。歳月の中に失ったものに代わって自然は詩人を慰め、人生の歓喜を与える崇高な存在であったことをあらたに認識させたのである。こうして自然は自己の人間としての存在の核心となるべきものを見出させ、詩人の内心の心に靈感を与え、この静けさの中にある美を通して、気高い思いをはぐみ育て、目にする一切のものが祝福に満たされているという揺るぎない信念を与えてくれたのである。これこそ詩人が歳月を経て、幾多の精神の苦難や遍歴を経て辿り着いた平安の境地であった。

『ティンターン寺院』の詩には次のように記されている。

この地を再訪した詩人は紛れもなく、かつての自分とは異なった存在となっていたと。自然に導かれるままに鹿のように山々を越え、深い川岸や静かに流れる小川を飛び回っていたかつての詩人にとって、「ごうごうたる大滝はまるで情熱のように私につきまとして」「高く聳える岩、山そして深く小暗い森、それらの滞る色合いと形は当時の私にとっては一つの欲望：一つの感情と愛」であったと。

そして詩人は続ける。

…… That time is past,
And all its aching joys are now no more,
And all its dizzy raptures.

そのような時は過ぎ去った。
そしてあのうずくようなすべての喜びも今はない
あのめくるめくような歓喜も。

しかし詩人はそのことに嘆きもつぶやきもしないと言う。と言うのもと詩人はさらに続ける。

Have followed, for such loss, I would believe,
Abundant recompence. For I have learned
To look on nature, not as in the hour

Of thoughtless youth, but hearing often times
 The still, sad music of humanity,
 Not harsh nor grating, though of ampler power
 To chasen and subdue. And I have felt
 A presence that disturbs me with the joy
 Of elevated thoughts; a sense sublime

他の賜物が引き継いでくれたからなのだ。

それはそのような喪失を豊かに償ってくれるものであったと私は信じたい。

と言うのも、私は思慮に欠けた若者の頃のようにではなく、

より豊かな力でいさめ鎮めてくれるものではあっても、

厳しくも耳障りでもない人間のかなでる静かで悲しい調べをしばしば耳にしながら、
 自然を眺めることができるようになったからである。

そして私は高揚した思いのもたらす歓喜で心を揺さぶるある存在を感じたのだ。

ここに記されるようにかつて若き日の「うずくような喜びもめくるめく歓喜も消え去った」にもかかわらず、そのことに嘆きもつぶやきも発せず済むのは「この損失を償ってあまりある他の賜物」を得たからに他ならない。「あの思慮に欠けた若者のようではなく」、
 「人間の奏でる静かな悲しい調べ」をききながら、「自然を眺めるようになった」と結論づけているのである。

このような詩人の精神の遍歴を辿ってみる時、キングズ カレッジ チャペルの“long-back'd”から“long-roofed”への手直しは、単なる構造上の事実に対する見直しに基づくものとするよりも、詩人の精神の遍歴の後にもたらされたものと考えてみることができるのではないだろうか。一見散文的にも思われる修正がなされたことの背景に、このように熟成した詩人の精神の遍歴があったことを深く心に留めたい。ワーズワスが湖水地方の故郷に戻り、最晩年を過ごした Rydal の美しく静かな自然に回帰した時、詩人はもはや、血気に燃え、動物的イメージを追い求め続けていた奔放な情熱の時から遥かに遠ざかり、このような静かな境地こそ歳月がもたらしてくれた reward と感じつつ、日々を過ごしたと思われずにはいられないのである。詩人の「意識下の意識」の究局の到達点であったのではないだろうか。

註

- 1) 前川 俊一 「若きワーズワス—詩心の成長と遍歴」 英宝社 昭和42年 P. 15.
- 2) *The Prelude or Growth of A Poet's Mind* by William Wordsworth (Text of 1805) With Notes by Shunichi Maekawa Vol II 研究社 昭和40年 Notes P. 42.